法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-06

カテゴリーとしての人種,エスニシティ,ネーション : ロジャース・ブルーベイカーの認知的アプローチについて

SATO, Shigeki / 佐藤, 成基

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
社会志林 / Hosei journal of sociology and social sciences
(巻 / Volume)
64
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
21
(終了ページ / End Page)
48
(発行年 / Year)
2017-07
(URL)
https://doi.org/10.15002/00021240

カテゴリーとしての人種，エスニシティ，ネーション

――ロジャース・ブルーベイカーの認知的アプローチについて――

佐　藤　成　基

アメリカの社会学者ロジャース・ブルーベイカーは，人種，エスニシティ，ネーションという概念によって理解されている現象を，実在する集団としてではなく，社会的世界を理解する際に人々が用いる認知のカテゴリーとして捉えるアプローチを提唱している。これを彼は「認知的視座（cognitive perspective）」と呼ぶ。このアプローチは，1980年代以後，人種，エスニシティ，ネーションの研究において中心的な枠組として広く受け入れられている構築主義的アプローチの議論を前提にしながらも，その「脱構築」の作業によって対象とすべき社会的現実それ自体を見失ってしまいがちな構築主義の隘路を越え，実際の経験的研究の現場で社会的現実を分析する有効な説明方法として提唱されている。

では，ブルーベイカーの認知的視座とはいったいどのようなものであり，人種，エスニシティ，ネーション研究にとってどのような点において有効性をもちうるのか。ブルーベイカーの名前は，特にシティズンシップ（国籍）研究においては，その著作がすでに翻訳されているということもあり，日本でも研究者の間ではかなり知られるようになっている。だが，彼が2000年代に入って展開している認知的視座については，いまだに必ずしも明瞭に認知され，理解されているとは言いがたい。そこで本論文は，そのブルーベイカーの認知的視座をあらためて紹介し，その意義について考察していくことにする[1]。

1　ブルーベイカーと「認知的視座」

ブルーベイカーが「認知的視座」という名で自らのアプローチを自覚的に展開するようになるのは2000年代に入ってからのことである。しかし，マックス・ヴェーバーの社会学的方法に依拠しつつ，当事者自身の世界理解や解釈に焦点を当てたアプローチは，1992年に出版された著作『フランスとドイツの国籍とネーション』（Brubaker 1992=2005）においてすでに明らかになっている[2]。博士論文をベースにしたこの著作のなかで，ブルーベイカーは早くから出生地主義を取り入れていたフランスと，純然血統主義をとり続けてきたドイツにおける，対照的な国籍制度の形成過程を比較している[3]。そこで彼は，それまで人口学的変化や地政学的状況といった「物質的」ないし「現実的」な要因から説明されることの両国の国籍法の違いを，両国において広く共有された「ネーションの自己理解」という「理念的」ないし「文化的」な要因によって説明しよう試みている。すな

わち，フランスにおいて国内に住む移民の子孫に対して開放的な出生地主義が導入されたのは，自国をフランス革命以来の共和国理念によって理解する「市民的（civic）」「国家中心的（state-centered）」で「同化主義（assimilationist）」的なネーションの自己理解が有力だったからであり，ドイツにおいて移民に対し閉鎖的な純然血統主義がとられてきたのは，古くから継承された血統や文化に基づいて自国を理解する「エスノ文化的（ethno-cultural）」で「差異主義（differentialist）」的なネーションの自己理解が根強かったからであると論じられた。そこでブルーベイカーは，この命題を論証するにあたって，議会での討論，政治家の公共での発言，法令などで実際に用いられている文言を検討し，それぞれのネーションの自己理解を定型的に表現する「文化イディオム」に注目したのである[4]。

ここで「文化イディオム」という概念で示されているのは，ネーションの自己理解をめぐる「型」であり，後の認知的視座における「カテゴリー」や「図式」の概念につながるものである。しかしながらこの段階では，「文化イディオム」はそれぞれのネーションの伝統と実体的に結びつけられがちであり，「市民的・国家中心的なネーション」はフランスの自己理解，「エスノ文化的なネーション」はドイツの自己理解というように，両国の「ネーションの型」として実体視されてしまう傾向があった。その結果，自己理解のカテゴリーそれ自体に着目する認知的視座の方法論が，十分に生かしきれていかった点は否めない。ブルーベイカー自身，後になってこの『フランスとドイツの国籍とネーション』での分析が，「「方法論的ナショナリズム」の視座」にとらわれていたことについて反省的に回顧している（ブルーベイカー 2016）。

認知的視座は，ブルーベイカーがその後，東欧のナショナリズムに研究のフィールドを移していくなかで次第に明確にされていった。旧ソビエト連邦やユーゴスラビア解体後のナショナリズムに関する論文を収録した1996年刊行の論文集『リフレーミングされるナショナリズム』（Brubaker 1996）でブルーベイカーは，ナショナリズム研究の多くがネーションそれ自体を実在として捉える実体主義に陥っている点を指摘し，それが当事者の用いる「実践のカテゴリー（category of practice）」と研究者が用いる「分析のカテゴリー（category of analysis）」とを混同する誤りから来ていると主張している。彼によれば，研究者の立場から「ネーションとは何か」が問われるべきではない。そうではなく，現実の社会で当事者たちがいかに「ネーション」というカテゴリーを用いて発言し，行動しているのか，それがいかにして社会過程の中で制度化され，広く共有され，あたかも実在の集団であるかのように「物象化（reification）」され，人々の行動を突き動かしているのかが問われるべきなのである。例えば，ブルーベイカーは次のように述べている。

> 「ネーションとは何か」が問われるべきではない。問われるべきは，いかにして政治的・文化的形式としてのネーションが国家の内部ないし国家間で制度化されるのかであり，いかにして実践のカテゴリーとして，分類図式として，認知的枠組としてネーションが作動するのかであり，国家によって，あるいは国家に抗して用いられるネーションのカテゴリーを共鳴性のある有効なものにさせるのは何なのかであり，ネーションを喚起させる政治活動を成功させるもの

は何なのかなのである（Brubaker 1996: 16）。

このように，ネーションを「実践のカテゴリー」として捉え，そのカテゴリーの社会的作用を明らかにしていくというのが，ブルーベイカーが「認知的」と呼ぶアプローチの基本的な方針になっていく。

2000年代に入るとブルーベイカーは，このアプローチを「ネーション」のみならず「エスニシティ」や「人種」にも拡張し，近年の認知心理学や認知人類学の知見を入れながら，人種，エスニシティ，ネーションの３つのカテゴリーを包摂する説明・分析の方法論として「認知的視座」を展開するようになる。ブルーベイカーがはじめて認知的視座それ自体を主題にして書いた論文は，2002年に発表された論文「集団なきエスニシティ」だった（Brubaker 2002）。その後，弟子のマーラ・ラブマンとピーター・スタマトフとの共著で書かれた 2004年の論文「認知としてのエスニシティ」では，認知心理学・認知人類学の近年の成果を積極的に取り込み，認知的視座の概略を描き出している（Brubaker et al. 2004）。今のところ，認知的視座をテーマとしてか書かれた論文として，この２つの論文が最も重要なものとなっている。

本論文は，この２つの論文を中心に，また他の著作・論文も参照しつつ，ブルーベイカーの「認知的視座」とはいったいどのようなものなのかについて整理し，それがナショナリズム研究にとどまらず，ネーション，エスニシティ，人種研究全般においてもつ意義について論じていく。

２　「集団主義」を越えて

〔１〕「集団」から「カテゴリー」へ

認知的視座においてブルーベイカーが問題視するのは，人種，エスニシティ，ネーションを実在する集団と捉える傾向である。それは日常会話やメディアの言論，政策や政治，さらには学術的研究においてさえ広く見られる。このような傾向を彼は「集団主義（groupism）」と呼んでいる。集団主義を前提にすると，人種，エスニシティ，ネーションはまるで単一の行為者のように何らかの「意志」や「利益」をもち，「アイデンティティ」を追求し，しばしば「希望」や「不満」もつ集合的な主体とみなされる。それは内部において同質，外部に対しては境界づけられた実体であり，社会分析における根本単位として扱われる。例えば「エスニック紛争」について語られる場合，「エスニック集団」がそこでの主要なアクターとしてみなされる。

しかしながら，そのような「集団」が現実に存在しているわけではない。例えば，あるエスニック集団に所属するとされるメンバーは，それぞれに異なった利益や意図をもって行動しているのであり，彼らが同一のアイデンティティを共有し，一体となって行動しているわけではないことは明らかである。

しかし，だからといって人種，エスニシティ，ネーションという概念で呼ばれている現象それ自体が存在していないというわけではない。認知的視座の観点から見れば，実際に存在しているのは，

人種，エスニシティ，ネーションという観点から行われた何らかの社会的実践である。すなわち，そこにあるのはエスニック集団それ自体ではなく，エスニシティの名を冠した集団的・組織的活動であり，ネーション（民族）それ自体ではなく，ネーション（民族）の名における利害要求や抗議であり，人種それ自体ではなく，人種の観点から行われる制度設計や資源配分である。あるいは，エスニシティを名乗る人々のネットワークであり，ネーションの概念を用いた言論や自己理解の方法であり，人種というフレーミングによる他者への嫌悪である。そこには，境界づけられた同質的な集団としてエスニシティなり，ネーションなり，人種なりの集団が実在しているわけではなく，人種，エスニシティ，ネーションというカテゴリーを用いて営まれる社会的・政治的実践があるにすぎない。ブルーベイカーの認知的視座は，このような実践の場を研究のフィールドとし，そこで人種，エスニシティ，ネーションのカテゴリーがいかに用いられているのかを研究の対象として据えるのである。

〔2〕構築主義への批判

しかし，おそらくここで疑問の声も寄せられるだろう。エスニシティ，人種，ネーションが集団としての「実体」ではないという見方についていえば，あえて認知的視座を主張せずとも，すでに構築主義のアプローチがこれまで繰り返し主張してきたことではなかったか，と。

たしかに，よく知られているように，構築主義は人種，エスニシティ，ネーションは所与の存在ではなく，社会的に「構築」されたものであり，時間とともに変化し，また論争的かつ多義的なものとであることを明らかにしてきた。それは1980年代以来，人種，エスニシティ，ネーション研究領域において広く受け入れられ，いまやほぼ「定説」として認められているといってよいだろう。

ブルーベイカーも構築主義の貢献について一定の評価を与えている（Brubaker 2002: 164）。むしろ彼が問題にするのは，構築主義が誰もが「正しい」と認める定説となっているという点である[5]。それについて，ブルーベイカーは次のように述べる。

> ［構築主義は］あまりにも明らかに正しすぎ，あまりにも自明視されすぎているため，さらに議論を進め，新たな洞察を生み出すために必要な摩擦，力，新鮮さをもたらさなくなっている。エスニシティやネーションが構築されているということはありふれた文言だが，いかにそれらが構築されたのかが詳細に明確化されることはほとんどない（Brubaker et al. 2007: 7，強調は原文通り）。

人種，エスニシティ，ネーションが「社会的に構築されている」と論じることは，今や誰からも反論を受けない「安全な」主張になっている。しかし多くの構築主義的研究は，その「正しい」発見を求めることには熱心だが，それ以上に考察が進んでいかない。そのため，人種，エスニシティ，ネーションがいかに「構築」されるのか，その過程やそのメカニズムについては十分な分析が行われていないのである。

実際のところ，構築主義者が明らかにする「構築」されたエスニシティに関する「正しい」知見と，現実の世界におけるエスニシティ現象との間には大きなギャップがある。たしかに学術研究の世界では人種，エスニシティ，ネーションが社会的な構築物であることが広く知られている。しかし，メディアでの報道や政策分析，排外主義や分離独立運動の言論，日常での会話など，現実の世界においては人種，エスニシティ，ネーションは依然として実体的な集団であるかのように語られ，取り扱われる場合が多い。人種は相変わらず「暴動」の担い手であり，エスニック集団はエスニック紛争の当事者であり，ネーションは「意志」や「利益」を持つものとして報道されたり，対処されている。これまで構築主義は人種，エスニシティ，ネーションを流動性が高く，不確定であり，断片的なものとして描いてきた。しかし，現実の当事者はしばしばそれらを自然な所与であり，不変な実在として見なしている。日常の自明性においては，人種，エスニシティ，ネーションは根強く集団主義に理解されているのである。たしかに構築主義は，分析者の集団主義は「乗り越え」たかもしれない。しかし，当事者の集団主義が「乗り越え」られたわけではない。構築主義的アプローチは，現在でも広く蔓延している当事者の集団主義を十分に説明しているとは思われない。そこにブルーベイカーは，構築主義のアプローチに潜む「エリート的バイアス」を見いだしている。

しかも，その一方で，人種，エスニシティ，ネーションの集団としての実在性を否定しているはずの構築主義者の議論のなかに，無自覚的に集団主義的な語彙が入りこんでしまっていることもある（Brubaker et al. 2006: 8）。例えば，エスニシティを「アイデンティティ」を追求する主体とみなしたり（「○○人のアイデンティティの政治」などのように），また紛争の利害当事者として人格化したり（「○○人と○○人の対立」「○○人の戦略」のように）するような場合である[6]。

さらに，構築主義がしばしば依拠する主要な分析枠組が，集団主義を強化してしまう場合もある。その一例として，エスニシティの「状況主義」的アプローチの創始者として有名なフレデリック・バルトの枠組がある（Barth 1969）。これは，現在エスニシティ研究の古典的分析ツールとしてよく知られているものであり，エスニック集団の「境界」（すなわち「われわれ」と「彼ら」を区別する境界）がつくり出される過程の状況的要因に着目したものである[7]。たしかにバルトの議論は，従来のエスニシティの集団主義的な前提を解体するものではあった。しかし，彼が用いる「境界」という物理的・空間的メタファーが，エスニシティの集団主義的理解を強化している側面もある（Brubaker 2009: 29; Brubaker 2014: 806）。バルトの意図とはうらはらに，「境界」のメタファーによって，私たちは明確に線引きされた状況超越的な境界をイメージしてしまう。それが「つくられ」たり「こわされ」たりするものだとしても，「境界」はエスニック集団の境界を意味することになり，結果として集団の実在それ自体が自明視されたままになってしまうのである。

同様のことは，ナショナリズム研究の古典であるベネディクト・アンダーソンの研究（Anderson 1992）についても言える。よく知られているように，アンダーソンはネーションが「想像の共同体」であることを明らかにしている。たしかにこの議論は，ネーションが実体的な（「現実の」）集団であるという一般的理解に挑戦したという点において画期的であり，そうであるがゆえに大きな影響力をもつことになったのである。しかしながらアンダーソンにおいても，「想像された」もの

が単一の「共同体」であるという点において，やはり「集団主義」の轍を踏んでいる[8]。しかもネーションは，「しばしば深い自己犠牲を伴った愛」によって結びついたものとされるのである（Brubaker 2009: 30）。

このように，構築主義のアプローチそれ自体が，集団主義から完全に自由なわけではない。それは構築主義が，人種にせよ，エスニシティにせよ，ネーションにせよ，「構築」される（とされる）対象を依然として「集団」ととらえているからである。それに対し認知的視座は，何かが構築されるということに注目するのではなく，その何かが構築されていく過程において人々の用いる認知的カテゴリーの働きに注目していくのである。

〔3〕「認知的転回」の意義

とはいえブルーベイカーは，構築主義の知見を完全に否定しようというわけではない。人種，エスニシティ，ネーションが社会的に構築されているという事実は明らかに正しい。ブルーベイカーのスタンスは，その知見を踏まえ，さらにそれを「一歩先に進める」（Brubaker 2002: 175）というものであり，それを可能にする方法が認知的視座ということになる。つまり人種，エスニシティ，ネーションがいかに語られ，いかに制度化され，いかに自明なものとなり，いかに愛着の対象となり（あるいは憎しみの対象となり），いかに（時として）「集団」としての現実性を帯びるようになるのか。その，社会的かつ認知的なメカニズムの解明が，認知的視座の課題になる。そこで主たる考察の対象となるのは，人種なり，エスニシティなり，ネーションを表象するカテゴリーであり，またそのカテゴリーを産出するカテゴリー化の過程なのである。

そこで，認知的視座にとっての貴重な知的資源を提供しているのが，いわゆる「認知的転回（cognitive turn）」から発展した認知研究，特に認知人類学や認知心理学の研究成果である。ブルーベイカーによれば，認知的転回とは「20世紀最後の30年間における最も重要な知的発展のひとつ」であり，「人文科学の様々な分野を変化させた」ものである。それは「心理学を革新し，言語学での論争を刷新し，人類学に新たな下位分野をつくり，人工知能や認知科学のような全く新しい学問分野を生み出した」。社会学においても近年，組織論の新制度主義的アプローチ，リスク研究におけるリスク認知の研究，社会運動研究におけるフレーム分析など，すでにその影響が多少なりとも見られる分野もある。だが，人種，エスニシティ，ネーションの研究において，認知的転回はまだ「始まったばかり」である（Brubaker et al. 2004: 54-55=2016: 271-272）。総じて社会学ではこれまで，当事者の認知それ自体の構造や過程はそれ自体が問われるとのないブラックボックスとされてきた（DiMaggio 1997）。認知的視座は，このブラックボックスの中身を明らかにするところから始まる。

そのためにブルーベイカーは，後述するように，認知心理学や認知人類学で用いられてきた「カテゴリー」「図式」「モデル」などの概念を参照しながら認知の社会的過程を分析し[9]，さらに認知人類学のローレンス・ハーシュフェルドやフランシスコ・ギル＝ホワイトなどによる「自然種」「本質種」についての認知メカニズムの研究を参照して，これまで構築主義が「反科学的」と断罪

してきた人間の「本質主義」的心性そのものを解明することを目指している。こうした認知的視座の基本概念や仮説について，３以下で詳しく論じていくことにしたい。

〔４〕ひとまとまりの領域としての人種，エスニシティ，ネーション

認知的視座の諸概念について説明する前に，ブルーベイカーの人種，エスニシティ，ネーションの３つの概念に関する理解の仕方について述べておきたい。本論文ではややまわりくどく響くことをあえて承知で，冒頭から「人種，エスニシティ，ネーション」というように３つを並列して表記してきた。それはブルーベイカーがこの３つのが概念をあえて区別せず，ひとまとまりの統一された研究領域として扱おうとしていることを反映させたものである[10]。

これまで人種，エスニシティ，ネーションという３つの概念は，研究者によって区別されて使用されてきた。最近ではこの３つの概念の境界が曖昧であることは広く認識されつつあるが，それらの区別を維持する努力は今も続けられている。そして，それぞれの概念ごとに多くの研究成果が蓄積されてきた。

しかしこの区別自体が曖昧であり，かつ恣意的であることは否定できない。それは研究者の研究上の立場や経歴，政治的・イデオロギー的な関心，また研究が行われている地域の特殊性などによって左右されている。例えばアメリカ合衆国では，人種は「ワン・ドロップ・ルール」に見られる厳格な白人対黒人の関係性によって概念化され，エスニシティは移民によって生まれたものとされ，ナショナリズムは国家形成と結びつけられて理解され，またどこかアメリカ以外の場所で起きるものであると捉えられてきた（Brubaker et al. 2004: 45=2016: 261）。もちろん，この区別自体がアメリカ合衆国の特有の歴史的事情に根ざしたものである。おそらくヨーロッパであれば，これらの概念はまた別様に解釈されるだろう。

しかも，さらなる概念上の混乱は，人種，エスニシティ，ネーションが研究に利用される「分析のカテゴリー」であるだけでなく，当事者が日常的に用いる「実践のカテゴリー」でもあるところから来ている。両者が食い違う場合もある。例えば，当事者が「ネーション」というカテゴリーで理解しているものが，研究者からは「エスニシティ」と捉えられるものかもしれない。しかしその場合で，そのどちらの用法が「正しい」のかを追求することにはあまり意味がない。というのも，そこでネーションやエスニシティの「正しい」定義を求めたところで，それは概念の恣意性を上塗りするだけに終わるからである。

さらに問題なのは，人種，エスニシティ，ネーション（ナショナリズム）それぞれの研究領域間の相互交流が案外と希薄なことである。それぞれの概念について，実質上ほぼ同様の議論が行われていても，相互の間で研究が参照されあう機会はそれほど多くない。しかしながら，３つのの概念には重なりあうところも少なくなく，人種研究の成果がナショナリズム研究に有効であったり，ナショナリズム研究の成果がエスニシティ研究に有効であるような可能性は大いにある。その可能性が生かされていないとすれば，それは研究の発展にとって好ましいこととは言えないであろう。

そこでブルーベイカーは，「そこで基底となっている認知的過程やメカニズムは，人種・エスニ

シティ・ネーションの３つの領域を通じて同一である」という観点から，３つの概念をひとまとまりの研究対象として扱うべきであると主張するのである（Brubaker et al. 2004: 48=2016: 262-263）[11]。

しかしながらブルーベイカーは，この３つの概念で扱われている領域を，全くの未分化なものとみなしているわけではない。研究者も当事者も，区別はたしかに曖昧で恣意的であったにせよ，それぞれ３つの概念を用いて異なった対象を捉えることを習慣としてきた。そこでの差異それ自体を無視するわけにはいかない。例えば「人種」であれば，何らかの具体的・身体的特徴と結びつけられることが多く，「エスニシティ」は固有の言語や習慣などと結びつけられて理解されることが多く，「ネーション」であれば国家の領域性とつなげて理解されることが多かった。

そこでブルーベイカーは，これまで３つの概念を使い分けることで区別されてきた様々な特徴を，より多様な次元で捉え直すことを提案している。その次元のリストは以下のようなものである（Brubaker et al. 2004: 48=2016: 262）。

- メンバーシップの基準や指標
- 継承（メンバーシップが獲得される様式）
- メンバーシップの固定性／柔軟性
- 自然化の程度と形態（例えば共同体の自然的基礎に対するアピールの程度や形態）
- 具象化の程度と形態（身体的特徴やその他の可視的特徴に付与された重要性）
- 固有の言語，宗教，習慣，その他の文化的要素に付与された重要性
- 領域化の程度と性質（領域的な組織やシンボリズムの重要性）
- 自律や自己充足性への主張の性質（もしそのような主張があった場合）

すなわち，正式のメンバーシップの基準が「血統」なのか国籍なのか。メンバーシップの獲得の様式が先代からの世襲なのか，長年の共同生活なのか。メンバーシップが固定的なのか，あるいは出入りが頻繁で柔軟性があるのか。遺伝子や「血」などの自然的基礎が自己理解にとってどれほど重要なのか。肌の色などの身体的な特徴がどれほど重要なのか。言語や宗教がどれほど重要なのか。「故郷の地」などの特定の領域とのつながりがどれほど重要なのか。独立や自治などの政治的主張が伴っているのかどうか――これらの様々な次元での差異を，人種，エスニシティ，ネーションの３つの概念だけで捉えきることはできない。しかし，研究者と当事者の双方において，これまで３つの概念を使い分けることで可能となってきた様々な差異の認知が，この８つの次元である程度（完全なものではないにせよ）把握できるであろう。

しかしながらより重要なことは，習慣上人種，エスニシティ，ネーション（ナショナリズム）という別個の研究領域として理解されている諸現象において，「認知的・社会認知的メカニズムと過程が（中略）本質的に同じ形式で作動している」ということである（（Brubaker et al. 2004: 49=2016: 263）。では，その認知的・社会認知的メカニズムとはどのようなものなのか。それにつ

いて以下でみていくことにしよう。

3　認知過程の解明に向けて

〔1〕カテゴリーとしての実在

認知的視座において，最も基本となるのは人種，エスニシティ，ネーションが「世界のなかの事物（things *in* the world）」ではなく「世界についての見方（perspectives *on* the world）」であるという見方であろう。これについて，ブルーベイカーは様々な箇所で繰り返し強調している。いいかえるならば，人種，エスニシティ，ネーションは，実体を持つ集団として（「世界のなかの事実」として）存在するのではなく，その存在を認知するカテゴリーとして（「世界についての見方」として）存在しているということである。つまり人種，エスニシティ，ネーションは実在する集団として行為し，アイデンティティをもち，意志をもつのではなく，人種，エスニシティ，ネーションのカテゴリーによって表象され，カテゴリーを用いてコミュニケートされ，カテゴリーを介して実践される過程そのものということになる。

だからといって，構築主義がしばしばそう主張するように，人種やエスニシティやネーションが「虚構」だとか「幻想」だとかということにはならない。たしかにそれらは集団としては実在しないかもしれない。しかし，それらを表象するカテゴリーが存在し，そのカテゴリーを用いた語りや実践が存在するという事実までを否定することはできない。例えば，ひとつのネーションが現実には（アンダーソンの考えるように）「深い同志愛」で結ばれた「共同体」ではなかったとしても，マイケル・ビリグが「平凡なナショナリズム」と呼んでいるような現象，ネーションのカテゴリーを用いた演説が，（そこで想定されている）「ネーション」のメンバーに向けて発せられるという現象自体は実際に存在する（Bilig 1995）。たとえ文化的多様性が高まり，社会的な格差が増大して，「国民」としての一体感が現実的に保持しにくくなっている状況においても，「国民」というカテゴリーはしばしば用いられ，時に一定の社会的・政治的作用（それは規範的に望ましい場合もあれば，望ましくない場合もあるだろうが）を果たすこともある（Brubaker 2004=2016）。

認知的視座は，人種，エスニシティ，ネーションに関するカテゴリーが，制度化された習慣や日常会話，政治的主張や運動などのなかで用いられ，いかに作用しているのかを明らかにすることを目指している。その過程については，大きく言って2つの方向からのアプローチが可能である。

ひとつは「上から」のアプローチである。これは公式のカテゴリー化実践，すなわち主として国家によってカテゴリーが提案され，喧伝され，課され，組織的に固定化され，統治機構のなかに埋め込まれ，統治実践のなかでルーティン化される過程についての解明である。例えば国家は，人口統計を通じて人種を命名し，分類し，計算し，その結果を利用して資源を配分する。国家はこのように，そのカテゴリー化作用を通じて「現実」をつくり出すことができる。その過程は，ピエール・ブルデューの「象徴権力（symbolic power）」の作用として分析することができる（Loveman 2005）。象徴権力とは人々に世界の「視界と区分（vision and division）」を強いるカテゴリー化の

力である（Bourdieu　1991: 220-251）。ある社会的カテゴリーを用いてそれを集団として呼び出し，自らがその集団を「代表＝再現前化（representation）」する活動において，象徴権力が用いられる。そのような活動を通じて「集団創出（group-making）」がなされるのである。さらにそのような「上から」のカテゴリー化が，一般の人々の自己理解や社会的組織化，政治的主張などにも影響を与えている。

もうひとつは「下から」のアプローチ，すなわちインフォーマルな日常的実践から見るアプローチである。それは，エスニシティが他者の行動を予期するための材料として用いられ，ステレオタイプとなり，自分（たち）の行動を説明し，存在を意味づけるために用いられ，さらには感情的連想の素材や価値判断の根拠として用いられる過程についての解明に向けられる（Brubaker et al. 2006: 167-355）。そこで人種，エスニシティ，ネーションのカテゴリーは，エスノメソドロジーが明らかにするように，「日々の巧妙な実践によってその都度成し遂げられていくもの」であり[12]，「ある時，ある場所で，人々の生活を構成する相互行為の営みの一部として認められ（あるいは拒否され），言明され（あるいは否定され），示され（あるいは無視され）る」ものとして分析することができる（Brubaker et al. 2004: 35＝2016: 242）。

いずれの過程においても，人種，エスニシティ，ネーションが最初から「事実」として存在することが前提にされていない。実体的な集団として存在していなくても，人種，エスニシティ，ネーションはカテゴリーとして作用している。そこで前提にされているのは，「世界についての見方」としてのカテゴリーであり，そのカテゴリーを用いた社会的実践の存在である。その実践の中で，カテゴリーの作用が，その「集団」としての共属感情や連帯感を促すことにもなる。その過程（それは不連続で，一般的な「発展」の方向性を同定することが困難な不確定（コンティンジェント）な過程になるが）を解明することが，認知的視座の課題ということになる。

〔2〕認知過程とカテゴリー（化）

しかし，カテゴリーは人種，エスニシティ，ネーションの３つの分野においてだけ重要であるというわけではない。人間の認知過程そのものにおいて，カテゴリーは本質的重要性をもっている。なぜならば，人は何ものかについて語ったり，考えたり，何ものかについて対処したりするとき，必ずカテゴリーを用いることになるからである。カテゴリーは「見ること（seeing），考えること（thinking）の基底にあるだけでなく，すること（doing）の最も基本的な形式を構成している」のである（Brubaker et. al 2004: 38＝2016: 246）。

そこでカテゴリーは，世界を「ある種の物事（a *kind* of things）」ないし「種々の物事（*kinds* of things）」として，複数の事象をある一定の特徴をもった一括りの存在として分類し，把握する装置として作用する。それは人間の認知能力の根底にある機能である。認知言語学者ジョージ・レイコフの言葉を借りるならば「物理的世界においても，また社会的・知的生活においても，カテゴリー化する能力なくして，私たちは全く機能することができない」（Brubaker et. al 2004: 38＝2016: 246における引用）のである。

このような認知研究の知見を受け，ブルーベイカーもカテゴリーが世界を理解可能，コミュニケーション可能にする作用について以下のように述べている。

> カテゴリーは私たちにとっての世界を構造化し，秩序づける。私たちは，カテゴリーを用いて，経験の流れを識別可能で解釈可能な物体，属性，事件などへと分節化するのである。カテゴリーは認知的・社会的・政治的な単純化を可能にする（というより，必然的に単純化を伴う）。「認知のエコノミー」の原則に従えば，カテゴリーは「最小の労力で最大の情報を提供する」。カテゴリーによって私たちは，異なったものを同じものと見なし，同じものとして取り扱うことができる（Brubaker et. al 2004: 38＝2016: 246）。

このブルーベイカーの議論を整理してみよう。まずカテゴリーは，世界の現象を分節化し，ある一定の理解可能なまとまりへと（ある「種」の物事や人々へと）分類する。それによって，あるカテゴリーに分類される事象を「同類」のものとみなし，それに含まれなければ「違う」ものとみなす。さらにカテゴリーを用いた分節化は，同一のカテゴリーに属する事物（人間）がいかなる特徴を持つのか（いかに作動し，いかに振舞う傾向をもつのか）に関する知識や期待を伴う。このような認知過程は「認知のエコノミー」の原則に従うため，必ず何らかの単純化を伴う。そのため，カテゴリー内部での差異やカテゴリーを越えた事象間の同質性は捨象される。つまりカテゴリーは常に「ステレオタイプ化」をはらむ。一般に「ステレオタイプ」というと「偏見」という否定的なニュアンスで捉えられることが多いが，ステレオタイプ化はあらゆる認知過程に伴ってみられるニュートラルな特性である。たしかにステレオタイプは偏見につながることもある。だが，その単純化作用によって人は現に手元にある情報を越えた推論を，最低限の認知処理で行うことが可能となる。「認知のエコノミー」の原則に従えば，ステレオタイプ化は人間の認知において不可避であり，不可欠な作用であるとさえ言える。

さらにカテゴリー化は，カテゴリーに分類された集団間の差異を強調する作用をもっている。これは社会心理学者ヘンリ・タジフェルの行動実験が明らかにした「社会的カテゴリー化」の作用である。タジフェルは，人は単にある集団に任意に分類されただけで，自らが所属する集団を「贔屓」にする内集団偏向を発生させることを明らかにした。人は自己が所属する集団への帰属を認知するだけで，その集団の存在を実体化する傾向がある。言い換えるならば，カテゴリー化それ自体が，内部の均質性と外部との異質性が過度に強調し，認知のカテゴリーを具体的な「物」として「物象化」する傾向をもつのである。そこで同一のカテゴリーへと分類された事象は，個々の事象それ自身の特徴によってではなく，カテゴリーの特徴を示す一事例として（例えば「赤組らしい人」として）として理解される。人種，エスニシティ，ネーションによる分類もまた，「対象となる個人を「個人の人格から特定集団の特徴を示す一例へ」と変換することにより，その個人を脱人格化するのである」（Brubaker et. al 2004: 41＝2016: 250-251）。

このような分節化，ステレオタイプ化，強調化といったカテゴリー化を通じて，人種，エスニシ

ティ，ネーションという概念による世界理解が成立し，そのような世界理解を用いた社会的実践が営まれている。例えば，「日本人」に関する日常会話，「日本人」の名による政治活動，「日本人」のための経済政策，「日本人」についての思想言論活動などにおいてこのようなカテゴリー化が作用し，制度化されることによって，「日本人」という集団が具体的な実在として「物象化」されるのである。繰り返しになるが，これは決して「日本人」という現象が実在しないということを意味するのではない。そこに「日本人」というカテゴリーを用いた社会的実践はたしかに存在している。

〔3〕図式の作用

しかしながら，人種，エスニシティ，ネーションを人々は単にカテゴリーだけで理解しているわけではない。カテゴリーによる事象の分類だけでは世界はあまりに単純で無味乾燥であり，世界を「意味あるもの」と理解したり，体験したりすることはできない。また，単純なカテゴリー化だけでは，人は周囲の出来事に対して義憤や不安にかられたり，感動や悦びを味わったりすることはないだろう。人間の世界理解にはカテゴリーを組み込んだより複合的な認知の枠組が作用している。認知心理学や認知人類学において，そのようなより複雑な認知装置のことを「図式（schema）」と呼ぶ。ブルーベイカーは，認知人類学者ロイ・ダンドレイドの言葉を引用しながら，次のように述べている。

> 図式は単に情報を表示するだけではなく，同時に情報の「処理機」でもある。すなわち図式は，知覚や想起を誘導し，経験を解釈し，推測や期待をし，行為を組織化する。このような意味において図式は，「最小限のインプットから複雑な解釈を生み出す一種の心的「装置」としての機能を果たしており，「単に心のなかに写しだされた「映像」なのではない」（Brubaker et al. 2004: 41＝2016: 251-2）。

カテゴリーと図式が違うのは，カテゴリーが経験や出来事を単に分類するだけであるのに対し，図式は経験や出来事を関連づけ，世界を慣れ親しんだ筋書（ストーリー）きにそって解釈することを可能にするという点にある。図式によって人は，新たな未知の経験や出来事を「いつもながら」の出来事の経過図式や，定型化された（疑似理論的な）因果関係図式によって，「よくある話し」の一事例として理解することがきる。

人種，エスニシティ，ネーションの領域において，図式の役割は重要である。人は単に人種，エスニシティ，ネーションをカテゴリー化するだけではない。図式により，世界を人種の観点，エスニシティの観点，ネーションの観点からら経験を分節化し，出来事を解釈するのである。

> 民がいかに分類されるのかだけではない。仕草，発話，状況，出来事，行為とその帰結がいかに分類されるのか，また分類を通してそれらがいかに解釈され経験されるのかが重要なのである。要するに，問題はエスニックな観点から［あるいは人種的ないしナショナルな観点から］

の社会的世界の見方，社会的経験の解釈の仕方に関してなのであり，単に社会的行為者の分類の仕方に関してではない。図式概念は，エスニックな［あるいは人種的ないしナショナルな］「ものの見方」の概念を明らかにし，具体化することに役立ちうる（Brubaker et al. 2004: 43=2016: 254）

ではじっさい，図式はどう作用しているのか。例として，ブルーベイカーがあげているものを2つ紹介しておこう。

そのひとつは，いわゆる「人種プロファイルング」の図式である。これは主にアメリカ合衆国における黒人という人種に関する認知図式のひとつであり，「黒人は黒人であるという人種的理由だけで白人警官から尋問されるものである」という筋書き（「脚本（スクリプト）」）によって成り立つ。黒人（と認知される人）はこの図式によって自分たちに対する「人種差別」を理解するのである。実際に起きているのが，必ずしもこの筋書き通りではないこともある。例えば，その黒人の行為は，人種を問わず尋問されてしかるべきものだったかもしれない。しかしながら，黒人が白人警官から尋問を受けたという事実それ自体引き金になってこの図式が作用し，「自分は黒人だから尋問されたのだ」とか，「あの男は黒人だから尋問されたのだ」というように，経験や出来事が「人種化」されて解釈される場合もある。これが「人種差別」に対する黒人の反発を発生させるのである。その図式が共有されていれば，他の黒人がこの反発に共鳴する度合いも高くなるだろう。

もうひとつはエスニック競合の図式である。これは「同一の労働市場において，人種集団あるいはエスニック集団は互いに職場を奪い合うものである」という筋書きによるものである。この図式に従うならば，自分が失業したという経験が「奴らに職を奪われたからだ」というように理解される。実際の失業の原因は，会社の経営の失敗や経済全体の景気の悪さであったり，あるいは政府の経済政策の失敗にあったのかもしれない。だが，エスニック競合の疑似理論によれば，失業の原因は「奴ら」，すなわち特定の人種集団やエスニック集団に帰属されることになる。このような理解は，「奴ら」に対する反感を強め，排外主義につながっていく。この図式がよく知られているものであればそれに対する共鳴性も高く，排外主義を広めることにもなるだろう。

いずれの場合も，当事者の不幸な事件が引き金になり，その出来事を馴れ親しんだ筋書きのなかで捉え，そこから自分が経験した不幸の理由や原因を自分や特定の人種やエスニック集団に求めるものである。この筋書きによって自分の経験や出来事が理解されることにより，そこに組み込まれた人種やエスニシティのカテゴリーは「リアリティ」を得る。もちろん，この筋書き通りの理解が，事態の誤認をはらんでいる可能性も高い。だが，認知メカニズムのもつ「認知のエコノミー」の原則に従えば，そのような理解の仕方が「最小の労力で最大限の情報を得る」ことのできる認知装置でもある。

〔4〕認知のメカニズム

カテゴリーや図式は意図的・戦略的に用いられ，誰かによって操作されることもある。エスニシ

ティ研究の状況主義や，ナショナリズム研究における道具主義のアプローチであれば，カテゴリーや図式が当事者の何らかの政治的あるいは社会経済的利害関心に合致するように人為的に操作され，配置され，動員されるものと論じるであろう。

しかし，ブルーベイカーによれば，そのような状況主義的・道具主義的アプローチが示す人間の認知に対する理解は極めて視野の狭いものである。「認知的転回」以後の認知心理学や認知人類学の知見に従うならば，「認知のほとんどが意図的でコントロールされたものではなく，意識されず，なかば自動的なものであることは明らか」だからである（Brubaker et. al 2004: 51＝2016: 267）。カテゴリーや図式による認知過程の大部分はむしろ自動的に，意図的にコントロールされることなく作動するものとされる。それらは，何らかの状況的な暗示（キュー）によって，意識されることなく作動をはじめるのである。そのためカテゴリーや図式は，当人に自覚されることなしに，その知覚や判断に影響を与える場合が多い。だからこそ，人々の「知的」な選択や意図的・戦略的な「行為」に注目しがちな社会学において，知的選択や意図的行為以前の，無自覚的で自動的に作動する認知のメカニズムは，これまで分析の対象とはされてこなかったのであろう。

しかしながら，このように認知の心的メカニズムに着目する認知的視座に対し，心理主義的・個人主義的な還元論に陥っていると批判することはできる。ブルーベイカーもまた，このような批判の可能性については意識している。たしかに認知の過程それ自体は心理学的なものかもしれない。カテゴリーや図式の概念も心理学の分野で用いられてきたものであり，先ずは個人の心理のなかで作動する装置として想定されている。

しかし，ブルーベイカーによれば，人種，エスニシティ，ネーションについての認知的視座は必ずしも個人主義的なものではない。なぜならば，人種，エスニシティ，ネーションといった社会的なカテゴリーは「社会的対象についての社会的に共有された知識」（Brubaker et al. 2014: 52＝2016: 269，強調は原文のまま）であり，またそれが使用されているのは社会的な関係性と実践の場だからである。「エスニシティ研究への認知的アプローチは，私たちの関心を個人の心理学ではなく，文化と認知，ミクロとマクロをリンクさせる「社会心的（sociomental）」な現象へと向かわせる。認知的構築こそが社会的構築なのである」（*Ibid*.）と，ブルーベイカーは主張する。

例えば，カテゴリーや図式は単に個人の認知装置のなかに存するのではなく，公共の記憶や言論のなかにコード化され，制度的・組織的ルーティンのなかに埋め込まれ，社会的に共有され，アクセス可能な「認知のテンプレート」として作用する。ただし，カテゴリーや図式の社会への波及・分散の様相は一様ではない。カテゴリーや図式が広く波及・分散していれば，人々はそのカテゴリーや図式を用いて考えたり，語ったり，他者を説得したりすることが容易になる。また，それが用いられた場合の社会的な共鳴性の度合いも高くなるのである。認知人類学者ダン・スペルベルの「疫学的（epidemiological）」なアプローチは，表象（ここで言うカテゴリーや図式）の波及・分散の状況からそのアクセス可能性の程度を明らかにしようというものであった（Sperber 1985）。それを踏まえてブルーベイカーは，カテゴリーや図式の「波及，分布，入手しやすさ（アクセシビリティ），顕現性の可変性に関心を向けることは，人種・エスニシティ・ネーションの中心性を自明視する既存研究の傾向

を回避することに役立つであろう」（Brubaker et al. 2004: 46=2016: 259）と論じる。人種，エスニシティ，ネーションが人々にとってもつ重要性は，それらのカテゴリーや図式が社会に波及・分布する程度に左右されるからである。

4　原初主義と状況主義

〔1〕「当事者の原初主義」

エスニシティやナショナリズムの研究において，「原初主義（primordialism）」とは，エスニシティやネーションを自然な所与であり，人間の本質的属性であり，不変なものと見なす立場のことを指している。これまで原初主義は，構築主義，状況主義，道具主義などのアプローチから厳しく批判されてきた。構築主義，状況主義，道具主義にとって，人種，エスニシティ，ネーションは社会的に構築されたものであり，状況に応じて変化するものであり，利害関心に応じて操作されるものだった。このような観点からみれば，原初主義は「本質主義的」であり「反科学的」なものだった[13]。

それに対してブルーベイカーは，認知的視座からこの有名な学問上の対立を再検討し，原初主義的アプローチを新たな視点から捉え直そうとする。

まずブルーベイカーは，研究のための方法として原初主義のアプローチをとる研究者がほぼ皆無であるという点を指摘する。「実際のところ原初主義的説明において，エスニシティを自然な所与であり変化しないものとして扱う真の原初主義者は，研究者ではなく当事者なのである」（Brubaker et al. 2004: 50= 2016: 264）。では，一般的に原初主義に分類されてきた研究者はどうなのか。例えば，しばしば原初主義の代表としてその名があがる文化人類学者クリフォード・ギアーツをとりあげてみよう。すると彼のエスニシティやネーションに関する説明は決して原初的なものではないことがわかる。たしかに彼は「原初的愛着（アタッチメント）」という言葉を使っている（Geertz 1963）。だが，そこで彼が意味していたのは，「現地の人々の理解においては自然で，前政治的で，不変なものと見なされていた紐帯のことであり，現地の人々の言論のなかでそのようなものとして表現されていた紐帯のこと」であって，決してギアーツ自身がそのような紐帯を「自然で，前政治的で，不変なもの」と見なしたわけではなかったのである（Brubaker 2015: 150=2016: 103）。ギアーツはエスニシティやネーションへの「原初的愛着（アタッチメント）」を，「想定された「所与」」（すなわち「知覚された「所与」」）として捉えていたのであり，彼自身がそれを「現実の「所与」」と捉えていたわけではなかった。すなわちギアーツは，当時者がもつ原初主義的愛着に注目しようとしたのである。そのようなギアーツの議論を，ブルーベイカーは「社会構築主義のパラダイムが論じるよりも巧妙であり，示唆に富むもの」と高く評価している（Brubaker et al. 2004: 49=2016: 264）[14]。

むしろ根強く原初主義の見方をとっているのは，研究者ではなく当事者たちの方である。そう見ると，原初主義と構築主義（ないし状況主義，道具主義）との対立は，研究上のアプローチの対立ではなく，むしろ当事者と研究者との間の見方の違いとして受け止めた方がよい。

そうであるとすると，人種，エスニシティ，ネーションの研究者は，原初主義を単に「反科学的」であると批判するだけではすまなくなる。原初主義は，研究者のとる「アプローチ」として批判の対象とされるものではなく，むしろ研究者が研究の対象とすべきものとして立ち現れてくるからである。アントニー・スミスの言葉を用いるならば，問題にすべきは「当事者の原初主義（participants' primordialism）」（Smith 1998: 158）なのである。このような観点からブルーベイカーは，認知心理学や認知人類学の知見を用いて，「当事者の原初主義」を捉え直そうとするのである。

なぜ人々は人種，エスニシティ，ネーションを自然な所与であり，人間の本質的属性であると見なすのか。なぜ，それらに対し「原初的な愛着」を感じるのか。近年の認知研究の知見によれば，それはそもそも人間に人種，エスニシティ，あるいはネーションを「所与」として自然化し，本質化して捉える普遍的傾向性が備わっているからなのである。例えば心理学者ダクラス・メディンは，「人には物事にはあたかもその物事を現にあるようにさせている本質や根本的本性があるように振舞う」傾向があるという（Medin 1989: 1476-1477）。また，同じく心理学者のマイロン・ロスバートとマージョリー・テイラーによれば，社会的カテゴリーがあたかも「自然種（natural kinds）」のように受け止められる場合があり，その結果人はしばしば「表面的な概観に基づいて深い本質的特性」を推論し，「恣意的なカテゴリー化にさえ深遠な意味を吹き込む」ことになる。（Rothbart and Taylor 1992: 12）。このような原初的な心的認知の傾向が，人種，エスニシティ，ネーションにおいてどのようなかたちで現われているのか。認知的な視座から，そのような当事者の認知の過程を明らかにする道が開かれるのである。

このように当事者が「自然なもの」と見なす認知過程のメカニズムを明らかにしようというのが認知的視座のアプローチである。ギル＝ホワイトの言葉を借りるならば，認知的視座は「分析的に自然化する者（analytical naturalizer）」ではなく，「自然化する者の分析者（analysts of naturalizers）」の立場から人種，エスニシティ，ネーションを考察していくものである（Gil-White 1999: 803）。

〔2〕認知人類学の知見

「当事者の原初主義」を説明するためブルーベイカーが特に注目している研究者はギル＝ホワイトとハーシュフェルドという2人の認知人類学者である。彼らは，認知心理学が明らかにした社会的カテゴリーをあたかも「自然種」であるかのように捉える認知的傾向を，エスニシティや人種に拡張した。彼らはともに，人間を遺伝する不変の「本質」をもった，「自然種」のメンバーとして捉える，根深い認知的性向を明らかにしようとしている。「2人とも，人種・エスニシティ・ネーションのカテゴリーを「自然化」し，「本質化」するきわめて一般的な傾向が人間の認知的性向の基礎にあると考えている」のである（Brubaker et al. 2004: 50＝2016: 266）。

そのような人間の「本質主義的」な認知メカニズムの特徴について，2人は異なった説明の仕方をしている。ギル＝ホワイトは，西モンゴルで行ったフィールド調査での聞き取りや観察に基づき，人が誰を，なぜ「同類」と見なすのかに関する直観的認知において，生物学的遺伝のもつ重要さを指摘している。その上で彼は，そのような認知的性向を，進化の過程における「学習コストの削

減」の結果生まれた「生物種」の認知モジュール（生物を自然な「種」と捉える認知装置で，「醜いアヒルの子」の寓話の中に表わされている）が，エスニック集団に転移されたことで発生すると推論している（Gil-White 2001）。

それに対しハーシュフェルドは，３・４歳児を対象とした実験に基づきながら，幼児が単に目立った外面的特徴によるだけでなく，周りの人間たちを「共有された本質」に基づく「固有種（intrinsic kinds）」へと分類する傾向があることを指摘し，人間は幼児期においてすでに（現代の大人であれば知っているはずの生物学の理論に影響されることなく）そのような原初的な認知を可能にする「ドメイン特定的な心的装置（domain-specific mental device）」を備えていることを明らかにしている（Hirschfeld 1998）。ハーシュフェルドはそのような認知装置を「世界に存在する「自然」種を呼び出す常識的な区分けの論理，あるいは社会の存在論」（*Ibid*.: 20）であるとし，その「原初的」な区分けの論理によって形成される常識的な知識を「庶民の社会学（folk sociology）」（*Ibid*.: 115）と呼ぶ。自然で所与の「原初的」な集団は，このような「庶民の社会学」のレンズを通してつくり出され，当事者たちにとって現実性を帯びるようになる。「このような集団は，特定の属性や状況（例えば，共通の行為や道具的な機能など），共有された感情（例えば，共通の政治的あるいは道徳的視座など）によって組織化されたものではない」（*Ibid*.: 20）。社会的世界を「自然種」へと分類する心的装置によって生み出されたものなのである。

〔３〕人種，エスニシティ，ネーションの状況依存性

しかしながら，たとえギル＝ホワイトやハーシュフェルドが主張するように，人種，エスニシティ，ネーションが自然で所与の集団と認知される傾向を人間が持っていたとしても，人種，エスニシティ，ネーションがいつも同程度に重要で，有意味なものであるわけではない。むしろ多くの場合，人々にとって人種，エスニシティ，ネーションのカテゴリーは日頃の日常生活においてそれほどの重要性を持つわけではない。人種，エスニシティ，ネーションの「顕現性（salience）」の高さは，状況に依存している。ある状況の下では人種，エスニシティ，ネーションが人の帰属にとって重要な意味をもっていたとしても，別の状況では特に意味をもたなくなる。このような人種，エスニシティ，ネーションの顕現性の変化の状況依存性については，これまで「状況主義」的なアプローチが明らかにしてきた。例えば，ジョナサン・オカムラは「状況的エスニシティ」という名高い論文のなかで，行為者がその置かれた状況においてエスニシティを「有意な要因」と捉え，それに「顕現性を付与」した時に，エスニック・アイデンティティが作動すると論じている（Okamura 1981: 454）。

しかし，どのような状況が人々にエスニシティを「有意な要因」と捉えさせるのであろうか。状況主義のアプローチにおいてしばしば利用されるのが，利害計算という道具主義的説明である。つまり，自分の社会経済的利益（生活の安定，地位の上昇などの）や政治的利益（権力欲の充足）に合致した場合にエスニシティは「有意」なものになるのであり，エリートは自分の利益を満たすためにエスニシティを戦略的に操作・動員しているという説明の図式である。しかし認知的視座から

見ると，このような状況主義的説明は人間の認知に対する理解が狭すぎる。なぜならば，すでに前段で確認したように，人間の認知はほとんどの場合，意図的でコントロールされたものなどではなく，意識されずなかば自動的に作動するものだからだ。ブルーベイカーの見方によれば，戦略的利用はエスニシティの状況的顕現性を説明する要因としてそれほど重要ではない（Brubaker et al. 2004: =2016: 267）。むしろエスニシティ（および人種，ネーション）のカテゴリー（それはすでに日常生活や制度のなかに埋め込まれているものであるが）は，状況の中で生起する何らかの特定の出来事が「暗示（キュー）」となって，自覚されないうちに作動を始め，人々の判断や行動に影響を与えるようになる。例えば，現代のアメリカ合衆国における警官の発砲事件は，黒人たちの人種的自己理解を喚起する「引き金」として作用している。

しかし，何が「暗示（キュー）」として作用し，どのような頻度で発生するのか，また，それがどのような具合に分布しているのかは，それぞれの文脈によって異なる。「直近的状況でのこうした暗示（キュー）の分布は，制度的文脈，文化的ないし社会的なミリユー，政治的契機などのより広い次元において様々な方法で形成される」（Brubaker et al 2004: 51＝2016: 287）のである。よって人種，エスニシティ，ネーションの顕現性における変化は，それを「操作」する意図的戦略性とのつながりによってではなく，それを自動的に作動させる「暗示（キュー）」が発生しやすい社会構造や文化的文脈との関係性のなかで明らかにされる必要がある。

このようにして認知的視座は，原初主義と状況主義というこれまで対立するとされてきた2つのアプローチを，認知のメカニズムという観点から相互に補完的なものとして再編成し直すことを可能にする。人種，エスニシティ，ネーションは原初主義的かつ状況主義的な特徴をもっている。認知的視座は，人間が人種，エスニシティ，ネーションを自然な所与と認知することを可能にする認知装置を明らかにするとともに，ある特定の状況的暗示（キュー）によってその認知がなかば自動的に顕現する認知のメカニズムを明らかにすることのできるものである。

5　変数としての「集団性」

〔1〕人種，エスニシティ，ネーションの「集団性」

人種，エスニシティ，ネーションのカテゴリーが人々によって受けとられる「重み」や，人々の判断や行動に与える影響は一様ではない。それは，単に日常的な会話においてルーティン的に語られるカテゴリーに過ぎないこともある。また，それが私的な利益追求のために「道具的」に利用されることもあるだろう。だが時に，人々の感情に訴えかけ，私心のない愛着心を喚起し，人々を集団的行動へと突き動かす場合もある。すでに論じたように，人種，エスニシティ，ネーションは「集団」としては実在しないが，「集団」としての実体性を伴って作用することもある。その場合，人種，エスニシティ，ネーションは連帯感を持って結びつけられ，境界づけられた実体であるかのように人々に理解され，そのようなものとして人々の行動を動機づけるようになる。

例えば，人種対立，エスニック紛争，民族紛争などにおいて，エスニシティ，ネーションはしば

しば「集団」としての実体性を伴って作用している。しかしそのような事例は限界的なケースに過ぎない（Brubaker et al. 2016）。多くの場合，むしろ人種，エスニシティ，ネーションは日常的な会話の中で語られ，あるいは制度のなかに埋め込まれたカテゴリーとしてルーティン的・無自覚的に作用している。

つまり，人種，エスニシティ，ネーションのカテゴリーは，一方においてルーティン的ないし事務的に用いられているだけの「平凡な」状態から，他方において「自己犠牲の愛」を喚起し，強度な団結力として作用する「熱い」状態まで，様々なグラデーションにおいて存在しているのである。そのような人種，エスニシティ，ネーションのカテゴリーの作用の変異を明らかにするために，ブルーベイカーはそれらの「集団性（groupness）」を変数として扱うことを提案する。人種，エスニシティ，ネーションにとって，それがもたらす集団性の程度は文脈に応じて変化する。

> 集団性は定数ではなく，変数である。それは集団（と想定されているもの）ごとに変化するだけでなく，集団内でも変化する。境界づけられ，連帯的な集団はエスニシティの［および人種，ネーションの］（中略）ひとつの様式ではあるが，ただひとつの様式でしかありえないのである（Brubaker 2009: 30）。

図：変数としての「集団性」

変数として集団性を図にすると上の図のようになる。このように「集団性を固定的で所与のものではなく，可変的で状況依存的なものとしてとらえることは，特別に団結性が高い局面や強烈な集合的連帯を感じている瞬間を，高度なレベルの集団性を一定で永続的なものと無自覚に取り扱うことなく説明することを可能にする」（Brubaker 2002: 168）。

〔2〕「集団性」を高める要因

では，ここで集団性を高めるような状況的要因とは果たしてどのようなものだろうか。その1つとして，組織化された暴力の応酬をあげることができる。ブルーベイカーはその事例として，少数の武装集団によって開始された暴力的行動の応酬が，「民族」としての集団性を高めたコソボにおけるアルバニア人とセルビア人の対立をあげている（Brubaker 1999; Brubaker 2002: 172）。

この対立は，1998年に小規模で武器も貧相だったコソボ解放軍がセルビアの警察官を攻撃するところから始まった。それに対するセルビア側の報復の対象となったのは，アルバニアの一般住民

だった。セルビア政府による報復は，コソボ解放軍による更なる報復を招いた。このような暴力の応酬は，コソボにおけるアルバニア人とセルビア人の間での集団性を高めただけではない。コソボの領域外のアルバニア人のあいだでの連帯感情も高まり，彼らのなかからコソボ解放軍へ参加する者や資金援助する者も現われたのである。その結果，コソボ解放軍によるセルビアに対する攻撃はさらに激化し，またそれに対するセルビアの報復もまたエスカレートしていった。こうして両民族の集団性は強化された。

こうした民族間の紛争は，決して両民族の「根深い民族感情」によってもたらされたわけではない。そのような集団的な「民族感情」の存在を前提にすることはできない。むしろコソボ解放軍とセルビア政府との間で交わされた暴力の応酬が，双方の「民族」の集団性を高めたのである。すなわち「集団的結晶化と分極化は，暴力の結果なのであって，原因ではない」（Brubaker 2002: 172）。内戦，戦争等の暴力紛争が，民族カテゴリーの集団性（その団結や連帯感情）を強化する結果をもたらすのは，決してこの事例に限られたものではない。

しかしながら，組織化された暴力は，ただそれだけで「民族」の（あるいは人種やエスニシティの）集団性を高めるわけではない。暴力の応酬が「民族」のカテゴリーで捉えられ，「民族」の観点から解釈されるには，そう捉えられ，解釈されやすくなるような歴史的記憶やその文化的表象がすでにある程度広く共有されている必要がある。「民族」のカテゴリーは，そのような歴史的記憶や文化的表象のなかに「割り込み」，それらと「接合」することで，比較的容易に集団性の度合いを高めることができるのである（Brubaker et al. 2004: 260）。上であげたコソボの事例でいえば，すでに1998年以前に発生していた紛争の記憶が，集団性の強化を容易にしていた。また，ユーゴスラビア解体期におけるクロアチア人とセルビア人の間で発生した「民族浄化」の事例では，ナチス占領時代の紛争の記憶（特にウスタシャ政権によるセルビア人の大量虐殺の記憶やそれを表象するウスタシャ政権の赤白チェックの旗）が背景にある（Brubaker 1996: 70-71）。暴力の応酬によって，「民族」のカテゴリーがこうした歴史的記憶や文化表象とともに動員され，人々の判断や行動に深い感情的な作用をもたらすのである。

だが，ブルーベイカーはこれまでのところ集団性の変化をめぐる体系的な議論は行っていないし，それを試みることの積極的意味を認めていないようにも思われる。というのも，彼によれば，強力な集団性の発生は不確定な歴史的状況に依存する「事件史的（eventful）」な過程だからである（Brubaker 2009: 31）。ブルーベイカーは，民族紛争が激化し，民族の集団性が高まりやすい状況として，大帝国の解体による地政学的変化やそれに伴うエリート間の権力闘争にしばしば注目している（例えば，第一次大戦後や冷戦終結後の中東欧の事例がそれである）（Brubaker 1996; Brubaker 1998）。しかしそれも，複数の具体的な歴史的事象を包括するかたちで論じられているにすぎない。「民族」の（および人種，エスニシティの）集団性の変化については，結局のところ，まずは実際の現場において観察し，それを通じて明示化していく以外にはないのである。

すでに指摘したように，そもそも人は日常生活のなかで常に人種，エスニシティ，ネーションへの帰属にとらわれて生きているわけではない。政治エリートがそれを動員しようとしても，常に一

般の人々の連帯感の喚起に成功するわけではない（むしろ失敗する場合の方が多いであろう）。例えばブルーベイカーと彼の共同研究者たちは，ハンガリー人が多く住むルーマニアの都市クルージュについてのフィールド調査に基づく研究のなかで，エスニシティの動員を目指す政治的アジテーションは行われていながら，人々の日常生活においては，エスニシティの「集団性」がそれほど高まっていない様子が解明されている（Brubaker et al. 2006）。これは民族集団を動員しようという「民族主義」的な政治家によるアジテーションが失敗している事例である。

人種，エスニシティ，ネーションが強度の集団性を帯びる場面は，むしろ例外的な「事件」（Brubaker 2002: 168）であり，それが常態であるわけではない。それらは人々にとって，「意味あるものとなる時に「生起する（happen）」」（Brubaker et al. 2004: 35＝2016: 242）にすぎないのである。そのような観点から，人種，エスニシティ，ネーションが喚起する集団性の変化を，それぞれの具体的な文脈のなかで考察していく必要がある。変数としての集団性という見方は，そのための前提となる分析枠組として重要である。

6　おわりに

これまで論じてきたように，認知的視座とは，人種，エスニシティ，ネーションを世界に存在する「事物」としてではなく，世界についての「見方」（ブルデューの言葉を用いるなら「視界（ヴィジョン）と区分（ディヴィジョン）」）の構成原理とみなすアプローチであった。ブルーベイカーは「認知としてのエスニシティ」の最後の段落で（共著者とともに）次のように述べている。認知的視座の適切な要約としてそのまま引用しておこう。

> 「人種とは何か」「エスニック集団とは何か」「ネーションとは何か」を問うのではなく，人々がいかに，いつ，なぜ社会的経験を人種，エスニシティ，あるいはネーションの観点によって解釈するのかを問おうとするのが認知的視座なのである。（中略）社会的世界の視界（ヴィジョン）と区分（ディヴィジョン）の重要原理が，意味のなさそうに見える日常行動のなかで作用する過程を明確化することにより，世界一般のなかでこの原理が作用する過程を理解すること。これに寄与することを認知的視座は目指している。（Brubaker et a. 2004: 53＝2016: 270）

認知的視座は，人種，エスニシティ，ネーションのカテゴリーがいかに利用され，いかに作用するのかを問うものであり，これらのカテゴリー（および図式）を用いた実践の過程（日常生活，政治・政策の過程，言論の場など）を分析の対象とするものであった。それは，人種，エスニシティ，ネーションを実体のある集団として捉える研究者の集団主義を批判しつつ，当事者が抱く集団主義を「実践のカテゴリー」の作用という観点から明らかにし，また「原初主義」と「状況主義」の対立する研究上のアプローチを当事者の認知の過程とメカニズムの観点から相互補足的なものととらえ直そうとするものであった。

このような認知的視座の大きな利点のひとつは，経験的研究にとっての利用しやすさではないだろうか。認知的視座が，人々が日常的に語られている社会的カテゴリーを調査研究の拠点にする。法律や行政，政策論争などのマクロで公共的な場面においても，また日常会話や習慣のようなミクロでインフォーマルな場面においても，人種，エスニシティ，ネーションのカテゴリーは実際に用いられていて，研究者にとってはアクセスしやすい素材である。また，仮に人種，エスニシティ，ネーションが社会的に構築された「虚構」であったとしても，そのカテゴリーが語られたり，書かれたりしているという現実は否定することができない。そのように人種，エスニシティ，ネーションに関するカテゴリーが用いられている実践を出発点にし，実際にどのように用いられ，それが人々の判断や行動にどのような影響を与えているかを検討するのが，認知的視座による研究の基本的方法となる。

しかも認知的視座の射程は，決して人種，エスニシティ，ネーションの領域に限られたものではない。すでにブルーベイカーは，認知的視座を近年のヨーロッパ移民諸国における「ムスリム」のカテゴリーの用いられ方の考察に用いている。現在ヨーロッパでは，移民に対する排外主義がエスニシティやネーションではなく宗教（すなわち「イスラーム」や「ムスリム」）のカテゴリーによって表明されるようになっているが，ブルーベイカーは，これまで「外国人」や「〇〇国人」と捉えられていた人々が「ムスリム」として読み替えられていく過程についての分析している（Brubaker 2012）。さらに最近ではジェンダーのカテゴリー化についても射程を広げている。『トランス――不安定なアイデンティティの時代におけるジェンダーと人種』と題された著作のなかで彼は，ケイトリン・ジェンナーの性転換（オリンピック十種競技の金メダリストであったブルース・ジェンナーが「ケイトリン・ジェンナー」という女性に性別変更したこと）とレイチェル・ドレザルの黒人「詐称」（黒人活動家として知られ，黒人地位向上協会の支部長であったレイチェル・ドレザルが実は白人であったことを実の親が公表した事件）をめぐるアメリカでの論争を比較検討しながら，現代アメリカにおける人種とジェンダーのカテゴリー化について考察を行っている（Brubaker 2016b）。

このようなブルーベイカーの研究の発展は，認知的視座が人種，エスニシティ，ネーションの領域にとどまらず，その他の社会的カテゴリーにも適用できるものであることを示している[15]。おそらく認知的視座は，社会学全般で用いられている様々な社会的カテゴリー（ジェンダーや階級など）の研究においても，その集団性を実体視する「集団主義」を乗り越え，当事者の認知の観点から（彼らの「実践のカテゴリー」として）説明・分析を行うためのより一般性の高い分枠上のアプローチとして用いることができであろう[16]。

しかし，ブルーベイカーの認知的視座には不十分な点も少なくない。先ず，認知の過程とメカニズムに関する分析的な概念装置が十分に練り上げられていないことである。「カテゴリー」や「図式」，「ドメイン特定的な認知装置」「暗示（キュー）」などの認知心理学・認知人類学で用いられている概念を紹介し，社会学的研究へ適用可能性を論じているにとどまり，「認知的視座の社会学」としての独自の概念体系が展開されているわけではない。特に「図式」の概念については，単にその有効性

が示唆されているだけで，ブルーベイカー自身それを利用した分析を試みているわけではない。

さらに指摘しておかなければならないのは，認知過程とマクロな社会的文脈との間の関係性に関する議論が弱い点である。認知的視座には個人主義的・心理主義的還元論に陥る危険性があり，ブルーベイカー自身もこの問題について自覚的である。**3**〔4〕で示した通り，これに対するブルーベイカーの反論は，認知のカテゴリーが公共的言論のなかにコード化され，制度的ルーティンのなかに埋め込まれ，社会的に共有された社会的知識を構成しているというものであった。しかし，人種，エスニシティ，ネーションのカテゴリーがどのような状況において，どのような強度において作用するのかについての体系的な議論はみられない。ブルーベイカーは「明らかに社会構造的，文化的，状況的要因はその変化にとって主要な決定因である」とし，「マクロレベルの決定因を媒介する認知的なミクロメカニズムを理解するとき，それらの変化についてよりよく理解することができるだろう」（Brubaker et al. 2004: 47=2016: 260）と指摘するだけで，それ以上の実質的な議論は展開されていない。

たしかにブルーベイカーの「事件史的」な視点からすると，カテゴリーや図式の作用やマクロ的要因との関係などに関する理論的体系化はあまり意味のないこととされるのかもしれない。しかし，認知の社会的過程を解明し，説明するためには，何らかのより一般化された概念装置を構築することが必要になるだろう。それが認知的視座にとっての今後の課題になる。

〔注〕

1．すでに筆者は，2000年代のブルーベイカーの論文を編集・翻訳した『グローバル化する世界と「帰属の政治」――移民・シティズンシップ・国民国家』での解説文（佐藤 2016）のなかで，ブルーベイカーの認知的視座に関する簡単な紹介を行っている。しかしこの文章は，翻訳本の解説という性格上紙幅も限られ，内容的に隔靴掻痒の感を免れない。本論文は，この解説の中身を拡張し，認知的視座についてのより詳しい紹介および考察を試みたものである。

2．この著作でのブルーベイカーのアプローチは，「理念」と「物質」に関する「世界宗教の経済倫理　序論」でのヴェーバーの以下の有名な命題から来るものである。

> 人間の行為を直接に支配するものは，利害関心（物質的ならびに理念的な）であって，理念ではなはない。しかし，「理念」によってつくりだされた「世界像」は，きわめてしばしば転轍手として軌道を決定し，そしてその軌道の上を利害のダイナミックスが人間の行為を推し進めてきたのである（ウェーバー 1972: 58頁）。

ここで「文化イディオム」の概念は，「世界像」として人々の行為を導き，人々の「理念的な利害関心」を形成する「理念」の役割を果たすことになる。

3．この著作の意義については佐藤（2005）を参照されたい。

4．「文化イディオム」は，この著作での分析において重要となる概念だが，それはシーダ・スコッチポル

がイランの革命を扱った論文（Skocpol 1985）において用いたものであった。

5．彼は皮肉を込めて「今や私たちは，みな構築主義者である」（Brubaker 2009: 28）と述べている。これは，ネイザン・グレイザーが多文化主義を批判した1997年の有名な著作のタイトル『今や私たちは，みな多文化主義者なのか？』を捩ったものである。

6．ブルーベイカーによれば，それは分析のカテゴリーと実践のカテゴリーとが十分に区別されていないことから来るものでもある。例えば構築主義者は人種，エスニシティ，ネーションの集合的アイデンティティが構築されたものであることを指摘し，アイデンティティが「断片化」され，「多元的」であると主張しながら，他方で自分たちのアイデンティティを主張する政治活動の（いわゆる「アイデンティティの政治」の）主導者たちの用いる本質主義的なアイデンティティ概念をそのまま引き受けてしまうことがある（Brubaker and Cooper 2000: 40-41）。そもそもブルーベイカーは，人種，エスニシティ，ネーションに留まらず，それ以外の社会的カテゴリー（階級やジェンダーなど）を「物象化」しがちなアイデンティティ概念を利用することそのものに反対している。アイデンティティの代わりに彼が用いる概念は，人々が自らの「アイデンティティ」を認知する過程を表す動詞形の「同定（identification）」であり，自らの「アイデンティティ」を認知している状態を表す「自己理解（self-understanding ）」などである。

7．バルトの境界創出（boundary-making）アプローチは，その後リチャード・ジェンキンズらによって発展させてられている（Jenkins 1997）。

8．アンダーソンの「想像の共同体」概念が単一の共同体を前提にしていることの問題点に関しては，佐藤（1995: 105）も参照されたい。

9．「モデル」の概念は「認知としてのエスニシティ」論文のなかには登場せず，ブルーベイカーの「認知的視座」のなかに明瞭に位置づけられていない。よって，本論では「モデル」概念に関する考察は行わない。しかし，Brubaker（2015a）での国民国家論において「モデル」概念は中心的な役割を果たしている。佐藤（2016）も参照されたい。

10. もっとも彼自身は，このようなまわりくどい表記を行っていない。例えば，本論文で中心的に参照している論文「集団なきエスニシティ」や「認知としてのエスニシティ」においては，「エスニシティ」の概念を用いている。しかしそれは，「エスニシティ」を「人種」や「ネーション」と区別して用いているわけではなく，記述の便宜上，人種，エスニシティ，ネーションの３つをまとめて表現する概念として「エスニシティ」を用いているに過ぎない。

11. 同様の主張は，アンドレアス・ウィマーによってもなされている（Wimmer 2013: 7-10）。ウィマーはまた，ブルーベイカーの言う「集団主義」を「ヘルダーの遺産（Herder’s heritage）」（ヨーロッパの「民族」概念に強い影響を与えた18世紀末ドイツ語圏の有名な思想家ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーの知的遺産のこと）と呼び，その批判的議論を行っている。

12. 日常の会話を「その都度達成されている（ongoing accomplishment）」巧妙な実践と捉えるアプローチは，ハロルド・ガーフィンケル以来のエスノメソドロジー独特のものである。

13. そのような批判の一例として，Eller and Coughlan（1993）がある。

14. 学説史的に考えてみても，ギアーツが素朴な「原初主義者」であると考えるのは無理がある。彼は1950年代にハーバード大学の社会関係学部において，機能主義社会学者として知られ，近代化論にも影響を

与えたタルコット・パーソンズの指導を受けた学生の一人であり，特に初期の業績においてはその用語法にもパーソンズの影響が濃厚に感じられる（例えば「文化システム」という概念を用いているところなど）。また，ブルーベイカーも指摘しているように，「原初主義者」ギアーツの代表作「統合革命」（Geertz1963）も，元来1963年に，『古い社会，新しい国家――アジアとアフリカにおける近代の探求』（強調は佐藤による）という彼自身が編集した本に寄稿したものである（後に［Geertz 1973］に再録される）。彼がこの論文で注目していたのは，「自然な所与」とみなされる紐帯が「脱植民地国家においてより大規模で，無限定的なエスニックな塊へと再結合され，集積されていくこと」であり，そこでの「エスニック」な紐帯はいかなる意味において「伝統」の残滓などではなく，むしろ「近代の産物」であった（Brubaker 2015b: 150=2016: 103）。

また，「原初主義者」としてのギアーツ理解に対する同様の批判は，オズキリムリや原百年によっても議論されている（Özkirimli 2010: 55-58; 原 2011: 50-52）。

15. ブルーベイカー自身「基本的な社会的カテゴリーの作用への関心は私の研究を統合する一貫した特徴である。ピエール・ブルデューによる実体論的思考への批判に従いながら，私は集団ないし実体からカテゴリーへの視点の転換を試みてきた」と述べている（ブルーベイカー 2016: 30頁）。

16. ブルーベイカーの認知的視座は，主にアメリカで展開されてきた文化社会学の系譜に位置づけることができる。ここで文化社会学とは，社会的世界を構成し，秩序化する意味理解のパターンととらえる分析的パラダイムのことを言う（佐藤 2010）。認知のカテゴリーや図式に着目するブルーベイカーの認知的視座は，このような文化社会学のアプローチの１つとみなすことができるのである。

1980年代以後，論理一貫した意味体系をもち，人間の行動を規範的に拘束するものとされてきた従来の文化概念が批判され，人間の意味理解を枠づけながらも選択や解釈の余地を残したより可動性の高い文化概念が展開されてきた。アン・スウィルダーの「ツールキットとしての文化」概念やチャールズ・ティリーに始まる「文化レパートリー」概念，社会運動論で発展した「フレーム」分析（アーヴィング・ゴッフマンの概念に依拠したもの）などがその代表的な例である。ブルーベイカーの初期の研究のなかで用いられていた「文化イディオム」の概念（本文**1**で紹介した）もその系列のなかに入る。他方，認知心理学・認知人類学の方では，「カテゴリー」「図式」「モデル」などの概念を用いながら，より複雑な心的構造を明らかにするようになった（D'Andrade 1995）。ここに文化社会学と認知研究との接点が生まれる。ポール・ディマジオはこの２つの分野の親和性に早くから気づいていた社会学者の１人である。彼は，特に「図式」の概念が「社会学者の関心にとって中心になる」と述べ，社会学者が扱ってきた「文化」を「相互に連関しあう図式のネットワーク」としてとらえた（DiMaggio 1997: 273, 281）。ブルーベイカーの認知的視座は，ディマジオが示唆した文化社会学の方向性の延長線上にある。

〔参考文献〕

Anderson, Benedict, 1991. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Revised ed. London: Verso.［＝1997，白石さや・白石隆訳『想像の共同体――ナショナリズムの起源と流行』NTT出版］

Barth, Frederik, 1969. “Introduction” in Barth ed. *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Cultural Difference*. London: Allen & Unwin.［＝1996，青柳まち子編・監訳『「エスニック」とは何か――エスニシティ基本文献集』新泉社］

Billig, Michael, 1995, *Banal Nationalism*, Sage

Bourdieu, Pierre, 1991, *Language and Symbolic Power*, Harvard University Press.

Brubaker, Rogers,1992, *Citizenship and Nationhood in France and Germany*, Harvard University Press.［＝2005，佐藤成基・佐々木てる監訳『フランスとドイツの国籍とネーション――比較歴史社会学的考察――』明石書店］

――― 1995, “Aftermaths of Empire and the Unmixing of Peoples: Historical and Comparative Perspectives”, *Ethnic and Racial Studies* 18 (2): 189-218.

―――1996, *Nationalism Reframed*. Cambridge University Press.

―――1999, “A Shameful Debacle”, *UCLA Magazine* (Summer): 15-16.

―――2002, “Ethnicity without Groups”, *Archives Européenes de Sociologie* XLIII (2): 163-189. Reprinted in *Ethnicity without Groups*, Harvard University Press, 2004: 7-27.

―――2004b, *Ethnicity without Groups*, Cambridge, Mass: Harvard University Press.

―――2004b, “In the Name of the Nation: Reflections on Nationalism and Patriotism”, Citizenship *Studies* 8 (2): 115-237.［＝2016年，吉田公記訳「ネーションの名において――ナショナリズムと愛国主義の考察」佐藤成基・髙橋誠一・岩城邦義・吉田公記編訳『グローバル化する世界と「帰属の政治」――移民・シティズンシップ・国民国家』明石書店］

―――2009, “Ethnicity, Race, and Nationalism,” *Annual Review of Sociology* 35: 21-42

―――2012, “Categories of Analysis and Categories of Practice: A Note on the Study of Muslims in European Countries of Immigration”, *Ethnic and Racial Studies* 36: 1-8.［＝2016年，髙橋誠一訳「分析のカテゴリーと実践のカテゴリー――ヨーロッパの移民諸国におけるムスリムの研究に関する一考察」佐藤成基・髙橋誠一・岩城邦義・吉田公記編訳『グローバル化する世界と「帰属の政治」――移民・シティズンシップ・国民国家』明石書店］

―――2014, “Beyond Ethnicity”, *Ethnic and Racial Studies* 37 (5) 804-808.

―――2015a, “Migration, Membership, and the Nation-State”, in Brubaker, *Grounds for Difference*, Harvard University Press.［＝2016年，吉田公記訳「ナショナリズム，エスニシティ，近代」佐藤成基・髙橋誠一・岩城邦義・吉田公記編訳『グローバル化する世界と「帰属の政治」――移民・シティズンシップ・国民国家』明石書店］

―――2015b, “Nationalism, Ethnicity, and Modernity”, in Brubaker, *Grounds for Difference*, Harvard University Press.［＝2016年，岩城邦義訳「ナショナリズム，エスニシティ，近代」佐藤成基・髙橋誠一・岩城邦義・吉田公記編訳『グローバル化する世界と「帰属の政治」――移民・シティズンシップ・国民国家』明石書店］

―――2016, *Trans: Gender and Race in an Age of Unsettled Identities*. (Princeton: Princeton University Press)

ブルーベイカー，ロジャース（佐藤成基訳），2016,「集団からカテゴリーへ――エスニシティ，ナショナリズム，移民，シティズンシップに関する三十余年間の研究をふり返って」佐藤成基・髙橋誠一・岩城邦義・吉田公記編訳『グローバル化する世界と「帰属の政治」――移民・シティズンシップ・国民国家』明石書店

Brubaker, Rogers and Frederick Cooper, 2005, "Beyond 'Identity'", *Theory and Society* 29 (1): 1-47.

Brubaker, Rogers, Mara Loveman and Peter Stamatov, 2004, "Ethnicity as Cognition", *Theory and Society* 33: 31-64. Reprinted in Ethnicity without Groups, Harvard University Press: 64-87.［＝2016年，佐藤成基訳「認知としてのエスニシティ」佐藤成基・髙橋誠一・岩城邦義・吉田公記編訳『グローバル化する世界と「帰属の政治」――移民・シティズンシップ・国民国家』明石書店］

Brubaker, Rogers, Margit Feischmidt, Jon Fox, and Liana Grancea, 2006, *Nationalist Politics and Everyday Ethnicity in a Transylvanian Town*, Princeton University Press.

D'Andrade, Roy, 1995, *The Development of Cognitive Anthropology*, Cambridge University Press.

DiMaggio, Paul, 1997, "Culture and Cognition", Annual Review of Sociology 23: 263-287.

Eller, Jack and Reed Coughlan, 1993. "The Poverty of Primordialism: The Demystification of Ethnic Attachments", *Ethnic and Racial Studies*, 16 (2): 183-202.

Geertz, Clifford. 1963, "The Integrative Revolution", in Geertz ed., *Old Societies and New States: The Quest for Modernity in Asia and Africa* Free Press.

――――1973, *The Interpretation of Cultures*. New York: Basic Books, Inc.［＝1987，吉田禎吾ほか訳『文化の解釈学（全２巻）』岩波書店］

Gil-White, Francisco, 1999, "How Thik Is Blood? The Plot Thickens…: If Ethnic Actors Are Primordialists, What Remains of the Circumstantialist/Primordialist Controversy?" *Ethnic and Racial Studies* 22: 789-820.

――――2001, "Are Ethnic Groups Biological 'Species' to the Human Brain?: Essentialism in Our Cognition of Some Social Categories" *Current Anthropology* 42: 515-554.

原百年, 2011,『ナショナリズム論――社会構成主義的再考』有信堂

Hirschfeld, Lawrence A., 1998, *Race in the Making: Cognition, Culture, and the Child's Construction of Human Kinds*. The MIT Press.

Jenkins, Richard, 1997, *Rethinking Ethnicity: Arguments and Explanations*, Sage.

Loveman, Mara, 2005, "The Modern State and the Primitive Accumulation of Symbolic Power", *American Journal of Sociology* 110 (6): 1651-1683.

Medin, Douglas L., 1989, "Concepts and Conceptual Structure", *The American Psychologists* 44: 1469-1481.

Okamura, Jonathan Y., 1981, "Situational Ethnicity", *Ethnic and Racial Studies* 4: 452-65.

Özkirimli, Umut, 2010, T*heories of Nationalism: A Critical Introduction*, Palgrave.

Rothbart, Myron, and Marjorie Taylor, 1992, "Category Labels and Social Reality: Do We View Social Categories as Natural Kinds?" in Gün R. Semin and Klaus Fiedler, eds. *Language, Interaction and Social Cognition*, Sage: 11-36.

佐藤成基，1995 ,「ネーション・ナショナリズム・エスニシティ ――歴史社会学的考察 ――」『思想』No.854: 103-127頁

――――2005,「監訳者解説」佐藤成基・佐々木てる監訳『フランスとドイツの国籍とネーション――比較歴史社会学的考察――』明石書店

――――2010,「文化社会学の課題――社会の文化理論へ向けて」『社会志林』第56巻，第 4 号

――――2016,「《編訳者解説》グローバル化の世界において「ネーション」を再考する――ロジャース・ブルーベイカーのネーション中心的アプローチについて」佐藤成基・髙橋誠一・岩城邦義・吉田公記編訳『グローバル化する世界と「帰属の政治」――移民・シティズンシップ・国民国家』明石書店

Skocpol, Theda, 1985, “Cultural Idioms and Political Ideologies in the Revolutionary Reconstruction of State Power: A Rejoinder to Sewell”, *Journal of Modern History* 57: 86-96.

Smith, Anthony D., 1998. *Nationalism and Modernism*, Routledge.

Sperber, Dan, 1985, “Anthropology and Psychology: Towards an Epidemiology of Representations”, *Man* 20: 73-89.

ウェーバー，マックス（大塚久雄・生松敬三訳），1972,『宗教社会学論選』みすず書房［原文はMax Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie* I, J.C.B.Mohr, 1988に収録］

Wimmer, Andreas, 2013, *Ethnic Boundary Making: Institutions, Power, Networks*, Oxford University Press.